



第73回新潟市芸能まつり

新潟室内合奏団 第92回演奏会

2025年 11月9日(日)

新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあ
コンサートホール

13:15 開場

14:00 開演

指揮 喜古 恵理香
独奏 長谷川 正規

シューベルト
ヴォーン・ウィリアムズ
モーツァルト

イタリア風序曲第2番ハ長調 D.591
バス・チューバと管弦楽のための協奏曲
交響曲第40番ト短調 K.550

※乳幼児同伴の場合は、出入り口付近にご着席ください。
周りの皆様の鑑賞の妨げになる場合はご退出願います。

ホームページ <https://niigata-chamber.moo.jp/wordpress/>
メール niigata.chamber.orchestra@gmail.com

主催：新潟室内合奏団、一般財団法人 新潟市音楽芸能協会、公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団
後援：新潟市、新潟市教育委員会、新潟日報社、朝日新聞新潟総局、読売新聞新潟支局、毎日新聞新潟支局
NHK新潟放送局、BSN新潟放送、NST新潟総合テレビ、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21



ごあいさつ

風は冬、光は秋、心地良い季節になりました。お忙しい中、新潟室内合奏団第92回演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

さて今回のソリストは、長谷川正規先生です。指揮者としてもご活躍ですが、当団とはチューバ奏者として4年前にブラームスの交響曲第2番にご出演いただきました。先生のチューバは穏やかで優しく、それでいて確固たる存在感で私達を支えてくださります。

それ以来、合奏トレーナーとしてご指導いただくようになりましたが、やはりあの魅力的なチューバで一緒にしたいという思いは募るばかり。とはいえ室内オーケストラでチューバがある曲をやる機会はなかなかありません。

ならばいっそ、協奏曲をやってしまえ！と長谷川先生にご相談し、ご快諾いただいた次第です。

協奏曲が隠れた名曲だと、敷居が高く感じるかもしれません。そこで皆様ご存知のモーツァルトの交響曲第40番をセレクトしました。「タラランタラランタララーラン」という聞きなじみのあるメロディーが心地良いのですが、実は意表をついた展開が多く、実際に弾いてみると「これは現代曲ではないか」と思います。その前衛性もあってか、1954年に作曲されたヴォーン＝ウィリアムズの協奏曲と1788年に完成した40番、意外に親和性があるようです。ウィーンで書かれたのにロッシーニの雰囲気をごわせるシューベルトの「イタリア風序曲」がその間を取り持ってくれているのかもしれません。

ウィーン、イギリス、イタリア風の国際色豊かなプログラムを料理してくださるのは、すっかりお馴染みになった喜古恵理香先生です。今や活躍の場が広がり、国内で行った事がない県は片手で足りるとのこと。毎週のように本番があるのに、丁寧かつ的確にご指導くださります。エネルギーでありながら繊細な音楽を生み出すのは、常に勉強を欠かさない真摯な姿勢と、「とにかく音楽が好きでたまらない」という情熱から迸っているのでしょう。

半年間かけて練習しているうちに、ご指導いただいた先生方の「味付け」で方向性が見えたように思えます。さまざまな具材を煮詰めた鍋料理のように、皆様に暖かい気持ちをお届けできれば、この上ない喜びです。

新潟室内合奏団 団長
福田 俊行

プログラム

F. シューベルト

イタリア風序曲 第2番 ハ長調 D.591

R. ヴォーン・ウィリアムズ

バス・チューバと管弦楽のための協奏曲 ヘ短調

I. Prelude: Allegro moderato

II. Romanza: Andante sostenuto

III. Finale Rondo alla Tedesca: Allegro

————— 休 憩 —————

W.A. モーツァルト

交響曲第40番 ト短調 K.550

I. Molt Allegro

II. Andante

III. MENUETTO Allegretto

IV. Allegro assai

指揮：喜古 恵理香

独奏：長谷川 正規

管弦楽：新潟室内合奏団

曲目紹介

フランツ・シューベルト (1797~1828)

イタリア風序曲 第2番 ハ長調 D.591

フランツ・ベーター・シューベルトは、31年という短い生涯の中で600曲を超える歌曲を作曲したことから「歌曲王」として知られていますが、創作は歌曲だけではなく、オペラ、交響曲、室内楽曲、・・・とさまざまなジャンルに渡っており、未完や破棄されたものを含めると、トータルで1,000曲以上の作品を作曲したとされています。

とはいえ、生前に出版されたのは126曲のみで、中には未完成交響曲のように死後に発見された作品も少なくありませんでした。

そんなシューベルトにとって、一番最初に公の場で演奏された記念すべき作品が、20歳の時に作曲された「イタリア風序曲」と言われています。

タイトルの「イタリア風」とは、当時ウィーンで大変人気のあったロッシーニの作風から影響を受けて作曲されたことに由来します。

なお、シューベルトには「イタリア風序曲」というタイトルの作品が2曲あり、二長調の第1番 (D. 590) とハ長調の第2番 (D. 591) で、本日演奏致しますのは第2番の方になります。

新潟県を代表するソウルフードといえば、「イタリアン」!!!

ということもあり、きっと新潟県民の皆様にご覧いただける作品であると信じて疑いません。(A.M)

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ (1872~1958)

バス・チューバと管弦楽のための協奏曲 へ短調

みなさんは「チューバ」と聞いて、どんな姿を思い浮かべるでしょうか。

「とにかく大きい楽器」「低い音で支える役割」「あまり主役にはならない」——そんな印象をお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。ところがこの曲では、そのチューバがオーケストラの中心に立ち、堂々と独奏を務めます。

作曲家レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ (Ralph Vaughan Williams, 明治5 [1872]-昭和33 [1958]) は、イギリスを代表する国民的作曲家です。フォークソングを愛し、牧歌的で人間味あふれる旋律を多く残しましたが、一方でチューバの響きを「ファルスタッフ的 (シェイクスピア作品に登場する、おどけた大男)」と語るユーモアも持ち合わせていました。この「バス・チューバと管弦楽のための協奏曲」は、彼の革新性と遊び心が見事にひとつになった作品です。

作曲は昭和29年 (1954年)。ちょうど映画『ゴジラ』第一作が公開された年に、世界初と言われているチューバが主役の協奏曲が誕生しました。クラシック音楽といえば、

モーツァルトやベートーヴェンといった200年以上前の作品が演奏されるのが常ですが、この曲はわずか70年前の誕生。日本では高度経済成長の時代と思うと、ぐっと現代に近い音楽に感じられるのではないのでしょうか。

第1楽章：プレリユード (前奏曲)

冒頭からチューバが主題を歌い出し、フリギア旋法や五音音階による古風で異国的な響きが広がります。中間部ではイギリスやアイルランド由来の舞曲「ダブル・ジグ」のリズムに乗って軽快に舞い、最後には最低音ピアノ左端のファの音から最高音ピアノ中央のラ♭の音まで駆け上がるカデンツァで、奏者の肺活量と技巧が限界まで試されます。

第2楽章：ロマンツァ

一転して穏やかで歌心あふれる楽章です。作曲家自身の指示により、チェロやファゴット、ユーフォニアムによる演奏も可能とされています。オーケストラとの「呼びかけと応え」によって、まるで森の奥で静かに語られるロマンスのような世界が描かれます。

第3楽章：フィナーレ (ロンド・アラ・デスカ)

「ドイツ舞曲風」と題されたロンド形式の楽章です。ワルツの主題が繰り返され、多彩に変奏されます。初演時、指揮者バルビローリが「想定より速かった」と苦心したという逸話が残るほど、軽快に舞い踊ります。独特の旋法が彩りを添え、最後はチューバが堂々と全曲を締めくくります。

かつて辛辣な批評家から「20分間の独奏はかなり手強い仕事となるであろう」と揶揄されたこの協奏曲ですが、今やチューバのレパートリーとして不動の地位を築いています。

イギリス音楽の伝統と、チューバという楽器の新たな可能性を切り開いた作品を、長谷川先生の繊細かつ力強い演奏でどうぞお楽しみください。(M.E)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756~1791)

交響曲 第40番 ト短調 K.550

この交響曲は1788年7月25日にウィーンで完成し、第39番・第41番とともに三大交響曲と呼ばれている。この頃のモーツァルトは1786年のオペラ「フィガロの結婚」、1788年のオペラ「ドン・ジョヴァンニ」の成功により、作曲家としての活動がピークにあった時期だった。ところが経済的には大変苦しい状況にあり、また1787年5月には父親レオポルトの死去、同年末に生まれた長女テレジアは翌年1788年6月に夭逝しており、身内の不幸も続いていた。モーツァルトはこの困窮から抜け出すために予約演奏会を計画し、わずか2ヶ月間という驚くべき短期間で、性格の違う3つの交響曲を一気に書き上げた。

第40番はトランペットとティンパニを用いないという特徴をもち、初稿と改訂版に

より編成が異なる。改訂版ではクラリネットが追加され、オーボエと分担して旋律を担うことで、音色に柔らかさと表現の幅が広がった。第40番の初演の記録は残っていないが、モーツァルトが初稿にはなかったクラリネットのパートを後から書き加えたことから、初演を聴いてから改訂したものと考えられている。

さらにモーツァルトの交響曲の中で短調はわずか2曲しかなく、第25番(同じト短調)とともに特別な位置を占める。第25番が「小ト短調」、第40番が「大ト短調」と呼分けられる。

第1楽章 モルト・アレグロ

第1主題はヴィオラと低弦の伴奏に導かれ、ヴァイオリンがため息のような旋律を奏でる。対照的に現れる第2主題は優美で柔らかい雰囲気を持つが、再び短調へ戻り、緊迫感を保ちながら演奏される。

第2楽章 アンダンテ

変ホ長調へ転じ、ゆったりとしたテンポで落ち着いた雰囲気のある楽章。第1楽章とは対照的に穏やかな旋律が展開されるが、ときに悲愴な面も垣間見せる。

第3楽章 メヌエット：アレグレット

通常の宮廷的で優雅なメヌエットとは大きく異なり、むしろ重々しい舞踏のような印象を与える。中間部のトリオでは一時的に長調に転じ、ほっとするような柔らかい旋律が現れるが、再び前半の短調の厳しさへと引き戻される。

第4楽章 アレグロ・アッサイ

冒頭から疾風のような勢いで始まり、全曲を締めくくる緊迫のフィナーレ。展開部では、めまぐるしく転調しながら激しい緊張を作りだし、そのまま終止まで突き進む。

(M.K)

指揮者プロフィール

喜古 恵理香



東京音楽大学音楽学部作曲指揮専攻(指揮)及び同大学大学院指揮研究領域に学び、これまでに指揮を患上淳一、汐澤安彦、下野竜也、田代俊文、三河正典の各氏に師事。

在学中、オーケストラアンサンブル金沢主催の井上道義氏による指揮者講習会にて優秀者に選出され、同講習会のリレーコンサートに出演。2017年9月からNHK交響楽団よりパーヴォ・ヤルヴィ氏のアシスタントに任命され、2年間アシスタントコンダクターを務めた。また2016年から4年間、京都市ジュニアオーケストラの活動に副指揮者として携わる。これまでに広島

交響楽団、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラアンサンブル金沢、札幌交響楽団、日本センチュリー交響楽団、東京都交響楽団、名古屋フィルハーモニー管弦楽団等と共演を重ね、今後も全国各地のオーケストラと共演予定。

オペラの分野ではNISSAY OPERA「アイナ・ダマール」の日本初演に携わったことをきっかけに、NISSAY OPERA「ドン・ジョヴァンニ」「コジ・ファン・トゥッテ」「ラ・ボエーム」「カブレーティ家とモンテッキ家」、藤原歌劇団主催「蝶々夫人」、二期会主催「フィデリオ」、新国立劇場主催「魔笛」「アルマゲドンの夢」「ファルスタッフ」、びわ湖ホール主催「ばらの騎士」など多数公演において副指揮者を務める他、びわ湖ホール主催公演ファンタジックオペラ「泣いた赤おに」にてびわ湖ホール声楽アンサンブルと共演。2022年、広島で行われた次世代指揮者コンクールにて第3位入賞、同時に聴衆賞、オーケストラ賞を受賞。

ソリストプロフィール

長谷川 正規



富山県魚津市出身。東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業後、同大学大学院音楽研究科修士課程修了。学部在学中に安宅賞を受賞、卒業時に読売新聞社主催第74回新人演奏会に出演。ソリストとして、松尾葉子指揮藝大フィルハーモニア、故岩城宏之指揮オーケストラ・アンサンブル金沢とR.ヴォーン・ウィリアムズのチューバ協奏曲を共演。また、台湾・国家音楽庁にて張浩指揮実践大学吹奏楽団とE.グレッグソンのチューバ協奏曲を共演。チューバ奏者として独奏、アンサンブル、オーケストラ等の領域で活動するほか、上越交響楽団、上越市民吹奏楽団、

新潟市北区フィルハーモニー管弦楽団などの指揮も行っている。これまでにチューバを稲川榮一氏に師事。現在、上越教育大学大学院学校教育研究科准教授。新潟県立看護大学「アートをたのしむ」、国立音楽大学「教科研究(指揮法)」各非常勤講師。